



1965年秋、大阪において日本化学会主催のもとに、第1回熱測定討論会が開催され、約200名の同好の人々の参加があった。その後、この討論会参加者数、講演数は年を追って増大し、また第2回目からは外国入学者の参加が始まり、研究内容も多様化、充実してきた。それらの情勢において、1969年熱測定研究会が設立され、組織の充実、運営の拡大に伴い、上記討論会はこの研究会主催となり、ニューズレター・綜説集の発行が定期的に行なわれ、国際的交流も活発となり、海外における評価も上昇した。昨年度においては正会員数は外人会員をふくめ620名、維持会員51社となった。そこで学会活動を質的にも量的にも一層高めるため、昨年の総会において、「日本熱測定学会」として改組されて新しい出発をすることが決議され、不肖小生が会長に推されることとなった次第である。本会の上述の発展はひとえに会員各位の御努力、御協力によるものであり、ここに改めて一層の御助言、御支援をお願いする次第である。

御承知のように、本討論会はもともとアメリカにおける Calorimetry Conference (1946年創立)、ソ連における All Union Calorimetry Conference 等の先例に倣って発足したが、同年(1965)、イギリスにおいても Experimental Thermodynamics Conference が発足し、同じ年に国際熱分析会議 (ICTA) の第1回総会が開かれた。その後フランスにおいてもフランス化学会熱分析部会の発足があり、本年は丁度わが国におけるように熱分析学者と熱測定学者の統合による学会が行なわれる。また、北米における NATAS、アメリカ化学会の Analytical Calorimetry 部会活動、北欧の Nordforsk 熱分析シンポジウム(1972年)の発足等、世界的にこの分野の研究活動の拡大と研究者数の増大が報ぜられている。これに伴い、J. Chem. Thermodynamics, J. Thermal Analysis, Thermochemica Acta 等の国際学術雑誌も発行され、国際的協力体制も一層強固なものとなりつつあ

り、本年は熱分析に関する日米セミナーも開かれるにいたった。

さて、本学会の特長は熱測定、温度測定の研究者と、熱分析の研究者の両者より成立していることであろう。このような人的構成および学問内容の相違と関連を率直に認め、しかもこの両者が益々互にその特徴を発揮し、その相補的価値を充分に相互尊重していくことが、本学会の生命維持にとって大切であることを会員の一人一人が改めて自覚することが必要であろう。精密な熱測定や温度測定に従事する人口の少ないことや、その分野の偏りがみとめられると共に、熱分析関係では安易な応用のみを追求する傾向がありはしないか。これらの現状をみつめつつ、その学問的水準を高めることこそ学会の発展の必須条件である。最近、とかくわが国におけるプロ精神の欠如があらゆる分野でいわれているが、われわれはこの点について改めて反省すると共に、自信を以て進むよう心がけたいものである。

ふりかえてみると、わが国における熱力学、熱測定の導入や、熱分析が開始されてから既に数十年の歳月を経ている。それにもかかわらず、わが国ではこの分野の研究は欧米先進国に比し、またソ連に較べ極めて散発的に行なわれてきたのは何故であろうか。またわが国の他の学問分野、たとえば物質の構造論的研究に比べ、エネルギー的側面の研究である熱測定、熱分析の研究がおくれたのは何故であろうか。これらの事柄は単純に説明されないが、わが国の産業が外国技術の patents 導入から出発していること、エネルギー資源を外国にほとんど依存していることとも関係していると考えられる。

一国で学問のあらゆる分野を擁することは、その専門の細分化により極めて困難であり、むしろ国際的な連帯があってこそそれぞれの国の存在が維持されることが益々明らかになりつつある現在、エネルギー問題の基礎的学問の重要な一分野である本会の学会活動には今後の大きな将来性と多くの期待がよせられよう。本会の新発足と討論会開催10周年の記念すべき年にあたり、会員一人一人の方からの自由な、しかも建設的な批判と助言を、新しく発刊される機関誌「熱測定」によせられると共に、学会の運営や行事について積極的な御意見をいただくことを期待して御挨拶といたします。